

— 幼児の保育中の「ケガ」に関する調査と報告 —

長谷川 憲 一

— A report on investigations of infant
injur in taking care of children —

Ken-ichi HASEGAWA

序 論

近年、核家族化や少子化が進み、家庭や個人の生活が尊重され物質的にも豊かになった。しかし一方では、この豊かさを支えるために、家庭生活の多様化と女性の社会進出が進んだ。都市化も俟って、地域内の親同士の交流や、子ども達の遊び集団が希薄になった。子ども達に限れば、今日健康上の問題も数多く、再々指摘がなされている¹⁻⁶。このような時代こそ、保育園の持つ社会的な役割は、一層重要なものとなる。

幼児期は、発育発達の急伸な時期にあり身心の成長が著しい。このような時期に、子ども達の健康生活上、より良い習慣や態度を育成することは、幼児教育とりわけ保育現場に要求されるものである。一日の大半を、保育園で過ごす子ども達には、当然のごとく保育者の指導と保護を必要とする。子ども達が日々元気に過ごすには、子ども達の健康や安全管理に、保育者が十分配慮しなければならない。しかし管理が先行し、保育内容が貧寒になったのでは、豊かで生き生きとした子どもを育てることは難しい。

本研究は、子ども達の保育活動中の事故「ケガ」を記録することにより、今後の保育活動の示唆を得ようとしたものである。

研究方法

子どもの「ケガ」の調査は、平成4年4月～5年3月までの1年間実施した、対象は安城市立保育園6ヶ園、対象人数は3歳児100人男児48人女児52人、4歳児247人男児121人女児126人、5歳児279人男児136人女児143人計626人、調査には保育担当者があたり、保育中の全ての「ケガ」を事故として、氏名、年齢、性別、日時、場所、「ケガ」の内容、部位、原因および状況等を、予め決められた用紙に記録した。得られた資料は項目毎に集計検討した。

結 果

1. 保育中における子ども達の「ケガ」の発生状況

〈年齢別「ケガ」の発生件数〉

表1参照、調査期間中の事故による「ケガ」の総発生件数は、対象児人数626に対して90.6%、件数にして567件であった。年間二度三度と重複して「ケガ」を

表1 年齢別「ケガ」の発生別件数

項目 年齢	人数	発生件数	総発生件数 に対する%	対象人数に 対する%
3歳児	100	216	38	216
4歳児	247	181	32	73
5歳児	279	170	30	61

(総発生件数 567件、発生数 90.6%)

する子どもも多数いたが、発生件数でいえば、ほぼ全員が年間一度は何らかの「ケガ」を経験しているようである。

年齢別「ケガ」の発生件数は、総発生件数に対して、どの年齢も30%台であるが、年齢が低下するほど発生件数が多い。しかし対象人数で見ると、3歳児の「ケガ」の発生率は216%と極めて高い。3歳児の安全管理の難しいことが推測される。

〈男女別による「ケガ」の発生件数〉

表2参照、男女児の「ケガ」の発生件数は、男児の方が多く、女児の2.5倍の発生件数であった。男女児の保育園での生活の違いが、明確に現れているといえよう。

表2 男女別による「ケガ」の発生件数

項目 性	人数	発生件数	総発生件数 に対する%	対象人数に 対する%
男 児	3 0 5	4 0 3	7 1	1 3 2
女 児	3 2 1	1 6 4	2 9	5 1

〈「ケガ」の発生時期と発生件数〉

表3参照、子ども達の「ケガ」の発生件数を月別にみると、4月182件29%、6月106件17%、5月94件15%、9月56件9%と多く、入園当初と夏休明けで、全体の60%を占めていた。10月以後急激に減少した。

表3 対象人数に対する月別「ケガ」の発生件数

月 項目	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発生件数	182	94	106	31	31	56	9	9	9	9	13	18
発生率	29	15	17	5	5	9	1.5	1.5	1.5	1.5	2	3

(対象人数 6 2 6 人)

〈「ケガ」の発生場所〉

図1参照、4月、6月、9月の子ども達の「ケガ」の発生件数の多い月をみると、いずれの月も、室内の発生件数の多いことがわかる。ことに梅雨時にあたる、6月の発生件数61件58%が多い。4月、5月は固定遊具での発生件数が多い。

図1 「ケガ」の場所別発生件数

	固定遊具	園 庭	室 内
4月 1 8 2 件	5 1 件(28%)	4 7 件(26%)	8 4 件(46%)
6月 1 0 6 件	17件(16%)	2 8 件(26%)	6 1 件(58%)
9月 5 6 件	2 8 件(50%)		2 8 件(50%)

(3月の総発生件数 3 4 4 件)

〈発生した「ケガ」の内容〉

表4参照、発生した「ケガ」の主な内訳は、「ケガ」の総発生件数567件の内、414件73%が打撲およびすり傷であった。その他の「ケガ」74件13%を含めると、86%が軽いものであった。骨折、脱臼が17件30%あった。

表4 発生した「ケガ」の主な内訳

項目 件数・率	打撲と すり傷	裂傷	骨折	脱臼	その他
発生件数	414	79	11	6	74
発生率	73	14	2	1	13

〈「ケガ」の発生原因〉

表5参照、子ども達の「ケガ」の発生原因は、転倒278件49%、ぶつかる62件11%などが多く、全体的に子どもの事故の特徴をよく現わしている。今後の対策を考える上で注目できる。

表5 発生した「ケガ」の主な原因

項目 件数・率	転倒	ぶつかる	挟む	滑る	切る	ケンカ	その他
発生件数	278	62	45	40	23	17	102
発生率	49	11	8	7	4	3	18

〈子どもの行動に問題があり発生した「ケガ」の件数〉

表6参照、明らかに子ども達の行動に問題がある、いわゆる子ども達の過失によるとみられる「ケガ」は、135件24%あった。年齢別では、年少児25件19%、年中児50件37%、年長児60件44%と加齢と伴に増加傾向にあった。

表6 子ども達の過失による「ケガ」の発生件数

項目 件数・率	年少児	年中児	年長児
発生件数	25	50	60
発生率	19	37	44

(発生件数 135件 (24%))

〈「ケガ」の発生原因になった行動の内容〉

表7参照、子どもの行動に問題があり、発生した「ケガ」が135件24%あったが、「ケガ」の原因となった行動の内訳は、「約束やルールを守らない」53件39%「行動が鈍い」50件37%が全体の103件76%あった。「冒険心および好奇心の過多」が22件16%あった。

表7 子ども達の過失による「ケガ」の原因行動

項目 件数・率	約束やルール を守らない	行動が鈍い	冒険心と好 奇心の過多	経験不足と 未熟
発生件数	53	50	22	11
発生率	39	37	16	22

表8 「ケガ」の原因の一部に保育士の過失が考えられる発生件数と内容

〈原因の一部に保育士の過失が考えられる「ケガ」の発生件数と内容〉

表8参照、発生原因の一部に、明らかに保育士の過失があると考えられる。「ケガ」の発生件数が101件17.8%あった。内訳は、「遊びの指導が不十分」38件37

項目 件数・率	遊びの指導 が不十分	生活指導が 不十分	遊び環境の 不備	その他
発生件数	38	24	22	17
発生率	37	24	22	17

(発生件数 101件(17.8%))

%「生活指導が不十分」24件24%「遊び環境の不備」22件22%にあった。

〈打撲すり傷の発生場所と件数〉

表9参照、子ども達の「ケガ」の73%を占める、打撲、すり傷の発生場所は、「グラウンド及び床」112件27%、「固定遊具」108件26%、「テラス」58件14%と施設での「ケガ」の発生件数が多い。また、「玩具」70件17%、「教具」17件4%と教材での「ケガ」の発生が21%あった。

表9 打撲、すり傷の発生場所と件数

項目 種別	グラ ン ド 及 び 床	固定遊 具	玩 具	テラス	教 具	机	階 段	体育器 具	その他
発生件数	112	108	70	58	17	12	12	8	17
発生率	27	26	17	14	4	3	3	2	4

(発生件数 414件(73%))

考 察

1. 子ども達の保育中の「ケガ」の発生状況

一般的に子どもの「ケガ」や、その発生頻度を考える場合、「ケガ」の程度、あるいは「ケガ」をどこまでの範囲と、規定するかが問題である。しかし今回の調査では、子ども達の安全指導上、小さなすり傷や軽い打撲など、保育士の目の届く限り、事故の全てを記録するように配慮した。実際には、それぞれの子ども達の個人的資質や、性格や性差によって、また保育士の姿勢など、各園で多少の違いがあり、この種の調査の難しいことを痛感した。

〈保育園における「ケガ」の総発生件数〉は、対象人数622人に対して90.6%、件数にして567件あった。とくでいの子どもが、2回3回と重複して、「ケガ」をすることも珍しくないが、ほぼ全員の子どもが、一年間に一度は、何らかの「ケガ」の経験をしているようである。このことを、どう判断するかは難しいが、日本学校安全会による、負傷、疾病による発生件数は、保健制度の確率と運用の円滑化にもよるが、年々増加しているようである⁷。軽い「ケガ」が結果によっては、大きな事故につながる恐れがあることを考えあわせると、園全体として、組織的環境的に避けることのできる「ケガ」については、事前に検討し、安全管理上の配慮が重要である。しかし一方では、子ども達の園生活が、過度に制約され、子ども達の生々とした活動、いわゆる人間本来の欲求である^{8、9}、自由で主体的な活動に支障があってはならない。

〈子どもの年齢別「ケガ」の発生件数〉は、総発生件数567件に対して、どの年齢も30%台ではあるが、年齢が低いほど発生件数が多い。3歳児については、極く小さな「ケガ」まで拾い上げ、記録したことにもよるが、対象人数当りの発生率は216%と極めて高く、3歳児の保育園での安全管理の難しいことが伺われる。

3歳児の身体は、4歳児5歳児に比べて、その体重心の位置が高く、足趾の発達も不十分である¹⁰。また、運動経験が浅く、自身の体をうまく支配出来ない。精神的には集団生活に不慣れで、入園当初は、一時的に情緒が不安定になること、母子中心の生活が一変し、園の施設の集団使用に対する約束ごと等の、理解が不十分であることが、「ケガ」を誘発する主な原因で

あろう。

3歳児の保育園での事故を防ぐには、3歳児は神経系に関する、運動の学習効果が高いので^{11,12}、入園当初より、少人数による集団遊びや、少人数による異年齢集団を、保育の中に積極的に取り入れ、これを組織することによって、情緒の安定を図りつつ、運動能力を高めることがよいと考える。幼児期にはそれぞれ保育活動上、目安としての発達段階があるが、集団遊びや群遊びが、うまく機能した場合には、保育が驚くほどの効果を上げることがある¹³。このような活動が、「ケガ」の発生頻度を下げえるかは別にしても、保育活動の安全性の向上を、促すことは十分に期待できるものである。

〈男女児による「ケガ」の発生件数〉は、男児の方が明らかに多く、女児の2.5倍の発生件数であった。女児は年間1人0.5回の割で「ケガ」をするのに対して、男児は1人1.3回あった。

性差による能力の違いは、生まれた時からすでにあり、殆どの面で男児が優っている。とくに、筋力に関係の深い運動や、動的なものは男児が、静的な運動や平衡感覚的なものは、女児が優っている^{11,12}。しかし、一般的に性差が問題になる場合、生物学的、生理学的なものに、社会的要素が加味される。いわゆる男の子、女の子だからといった考え方が、子育ての過程で必要以上意識されることによって、実際には、より大きな違いとなって現れているのではないか。今回の調査による、男女児の「ケガ」の発生件数は、男児に著しいが、このことは保育の中身の違い、いいかえれば、活発な遊びを好む男児と、静的な遊び経験の多い女児の、生活の違いが現れたのではないかと推察する。

実際に記録した保育母の話では、保育活動の中で、これらの保育母達が経験上「危険だ」「あぶない」と感じた場面での、「ケガ」の発生率は、女児の方が高いと一様に感じているようである。記録上、女児の「ケガ」の発生件数が低いからといって、女児に対する保育母の、安全管理上の負担が軽減されるものではない。

〈子どもの「ケガ」の発生時期と発生件数〉は、4月182件29%、6月106件17%、5月94件15%、9月56件9%が多く、これらの月で年間の「ケガ」の70%を越す。10月以後「ケガ」の発生件数が急激に減少していることが注目されよう。

各園、4月5月は多くの新入園児を抱える時期である。3歳児は、園生活に不慣れなことによる情緒不安。4歳児5歳児は、新しく年中児、年長児になったことと、新年度に対するある種の期待と興奮、同時に年中児、年長児としての生活経験が浅い。保育母の側にも、転勤や園内移動など、この時期は様々な要因が錯綜し、園全体に落ち着きがないことが多い。6月は長い梅雨の最中にあり、戸外での遊びが大巾に減少し、園全体に子ども達の身体的欲求不満が高まる。このことが、多くの子ども達に精神的なストレスを生み、情緒が安定しないことが多い。子ども達の間にはケンカが増えたり、嘔みつき子、引っ掻き子が出没することもこの時期に多い。9月は、若干軌道に乗り掛けた保育活動が、8月に相当数の子ども達が、長期の夏休みを利用することが多く、保育活動が一時的に中断することが多い。また夏休みを利用する、子ども達の多くに、母親とベッタリした、家庭生活を送ることにより、一時的に身心の退行現象がみられ¹⁴、9月当初の保育園は、4月と似通った状態に落入ることが考えられる。

以上、これら「ケガ」の多い月に共通していることは、子ども達が精神的に不安定であったり、子ども達の遊び集団の機能が低下していたり、園全体として、保育の方向性が一時的に希薄になることが、子ども達の「ケガ」の発生原因の、大きな要因になっているのではなからうか。子ども達の「ケガ」の発生件数を少なくするには、「ケガ」の総発生件数の70%を占め

るこれらの月を、どのように乗り切るかに掛っていると見えよう。突き詰めていけば、4月をどのようにスタートし、その後の1・2ヶ月で、子ども達の情緒の安定を図り、主体的に運動遊びのできる、子ども集団を早期に育成することである。¹⁵*原田は、集団および群から離れた子どもは、事故に遭遇することが多いといっているが、保母がこのような遊び集団を、うまく組織することが、「ケガ」の減少や保育活動の安全性の向上に、つながる近道ではないかと考える。

〈子どもの「ケガ」の発生場所〉を、4月、6月、9月の「ケガ」の発生件数の多い月に限れば、4月室内84件40%、固定遊具51件28%、園庭47件26%、6月室内61件58%、園庭28件26%、固定遊具17件16%と室内での「ケガ」の発生率が高い。また4月は、固定遊具に関わる「ケガ」の発生件数も多い。いわば、この時期の子ども達は、園内のどこでも事故を引き起こす恐れがあるといえよう（表9参照）。

各月とも保育室での「ケガ」が多いが、今日保育室は、さながら劇場のセットの早変りのように、様々な使われかたをしている。保育室は、朝夕の送迎室になったり、学習教室になったり、昼食やおやつ食堂になったり、遊戯室や音楽室になったり、テレビの視聴や紙芝居のホールになったり、寝室や更衣室、暑さ寒さ、雨や風からの避難所や休息室にもなる。このような使われかたをする保育室には、机やイス、教材、教具はもちろん、整理棚、オルガン、テレビ等々、様々なものが準備されている。いずれはパソコン、ファミコン、ワープロも準備されよう。このような保育室で、多数の子ども達が一緒に生活していれば、事故が多発するのも当然であろう。文字が沢山読める、書ける、数の足し引きができる、絵本の中の、動植物の名前の多くを知っているなどの、机上の知識を偏重すれば、必然的に保育室での活動が多くなる。梅雨時には、戸外での遊びは減少し、当然保育室を利用することになる。子ども達を、長時間保育室に囲うことになれば、子ども達にストレスが蓄積し、情緒が不安定になることは、自然な現象であり、「ケガ」にも結びつくものである。本来、身心の発達の著しい子ども達の、本質的に必要な知識の多くは戸外にある。互いの遊び仲間の中にある。室内での「ケガ」の発生件数が多いということは、保育の片寄を示しているともいえよう。

一方、固定遊具での「ケガ」は、比較的大きな事故を誘発することがある。子ども達が使用する、器具や施設などの点検や管理は注意深く行ない、危険な箇所や場所に気付いたなら、速やかに改善しなければならない。また施設や器具の安全な使い方や、ルールの確認などは、常に、具体的な動作を交えて、指導することが大切である。本来、幼児は4歳児5歳児になると、固定施設にそれほど依存しなくとも遊べるものである。子ども達は、楽しい仲間と十分な時間、そして、広場があればささやかな遊具一つでも、遊びを工夫し発展させるものである。また、そのような能力を促すことが保育のねらいでもある。

室内と同様、各月とも園庭での事故も多い。園庭での「ケガ」の発生原因の多くは、「ころぶ」「ぶつかる」「つまづく」「すべる」など、子ども本来の特性に起因することが多い。注意力が散漫で、自己中心的な子どもや、自己堅持欲の強い子どもは、自分自身はもちろん、他の子ども達の事故を、誘発することが多々ある¹⁶。このような子どもには、予め保育者が十分に注意し、集団の中にうまく、取り込むことが良い効果を生む。園庭での事故が多いからといって、保母が消極的になったのでは逆効果である。

* 兵庫教育大学

今日、地域では子ども達の遊び集団が希薄になり、伝承遊びは、サッカーや水泳などのスポーツに、創造、創作的な遊びは¹⁾、テレビやファミコンに変わりつつある。施設についても、柔らかな砂の多い土の運動場は、堅くしまる山土やグリーンサンド（碎石砂）、あるいは、アスファルトや人工芝に改変されつつある。都市化による急激な社会変化があったにせよ、子ども達だけでも柔らかな土の上で、自然環境に恵まれた所で、伸々と遊ばせたいものである。しかし一方では、最近の子ども達が、よく骨折等の「ケガ」をする。体力が低下したとあって、その回復手段に、裸足保育や裸体保育、体力作りを目的とした幼児のマラソンを、保育の中に安易に導入することには疑問が残る。

〈子ども達の引き起こす「ケガ」の内容〉は大きな「ケガ」骨折、脱臼、裂傷など、17件あるものの、414件73%が打撲すり傷で、その他の「ケガ」虫さされ、つき指、かき傷など74件13%を含めると、86%の事故が軽い「ケガ」で治まっていた。

子ども達が額に汗して、元気に遊び回る姿は、誰がみても微笑ましいものである。しかし、不可抗力による事故も含めて、一度でも重大な「ケガ」を招来しようものなら、子どもの将来に、大きな過恨となって残ることにもなる。今回の調査では、固定遊具（築山、鉄棒、ブランコ、ジェットジム）施設（テラス、足洗場、プールサイド）等で、大きな「ケガ」が発生したが、それぞれの保育園が、情報を交換しつつ今後の対策を検討する必要がある。

〈子ども達の「ケガ」の主な発生原因〉は、転倒278件49%、ぶつかる62件11%、挟む45件8%、滑る40件7%、切る23件4%、ケンカ17件3%、その他108件18%であった。先にも述べたが、これらの結果は、幼児の特徴をよく現している。原因から考えれば、子ども達の「ケガ」の多くは、事前に子ども達が若干の注意をすれば、避けたり防ぐことのできるものが多い。このような自損的ともいえる「ケガ」は、子ども達の危険意識と判断力を、少しでも高めることができれば、ある程度回避できるものである。どのような遊びの場面でも、集中力のある子どもは、他の事にも細く注意を払うことができるからこそ、「ケガ」は少ないのである。このような子どもの能力は、遊びに熱中するなかで、日々獲得されていくものである。

〈子どもの過失による「ケガ」と保母の過失が関与している「ケガ」〉、明らかに子どもの行動に、問題があることによって発生した「ケガ」が、135件24%あった。このような過失による「ケガ」は、年中児、年長児に多くみられた。過失の内容を、子ども達の行動にみると、約束やルールを守らない、行動が鈍く身のこなしが悪い、冒険心および好奇心の過多等が主な原因であった。しかし一方では、「ケガ」の発生の一部に、明らかに保母の過失が、関与したと考えられる事故が、101件17.8%あった。保母の過失の内容は、遊びの指導や内容に問題があったり、遊び環境の不備が、子ども達の「ケガ」を誘発したと考えられる。

子ども達は、それぞれに資質や個性を、明確に持っている。保育中の事故を防ぐには、子ども達の資質や個性はもちろん、遊びの現状や能力を、保母は具体的にとらえ指導することが大切である。

要 約

－幼児の保育中の「ケガ」の発生に関する調査報告－

幼児の「ケガ」の発生に関する調査をしたことによって、保育に関する若干の問題点と示唆

が得られた。

- 1) 子ども達の年間の「ケガ」の発生件数は、567件発生率90.6%と多くあった。内容的には、軽い「ケガ」が全体の86%を占めていた。原因的には、発育期の幼児の特質が、招来したと考えられる「ケガ」が多くあった。
- 2) 年齢別には、3歳児は園内の全ての場所で、4歳児、5歳児は運動場、保育室での「ケガ」が多い。男児、女児では、男児に「ケガ」が多くあった。しかし、女児の安全性が高いというわけではなかった。
- 3) 「ケガ」の発生時期は、4月、5月、6月、9月で全体の60%を占めていた。このことは、この時期の保育に、十分配慮すれば、相当数の「ケガ」の発生件数を、減少できることを示唆している。固定遊具での「ケガ」は、大きな事故につながる恐れがあるので、ルールや正しい使い方などは、十分に指導されなければならないことが確認できた。
- 4) 各年児とも、室内での「ケガ」が多いが、子ども達の発育発達を考えると、少しでも多くの時間、戸外に出し活動的な集団保育を押し進める必要がある。
- 5) 「ケガ」の発生原因の一部に、保母の過失があると考えられる、ケースが相当数あることが確認できた。これらについては一度、詳細に検討を加える必要がある。

今日子ども達の、安全かつ積極的な保育活動は、最も求められていることである。子育ては単に、一保育園一家庭で対応できる問題ではない。それぞれの、市町村全体の問題として、今後は検討されなければならない。

Summary

—A report on investigations of infant injur in taking care of children—
KEN-ICHI HASEGAWA

- 1) We could observe infant injury in 567 cases and that's reach 90.6 as a percentage of outbreak but "slight injury" form 86 percent of the whole. This relieve us.
- 2) The next case get our eyes together.
 - Three years old children is wounded in a built-in-playground equipment gronnd and childcare room.
 - Four years and Fire years is wound in ground and childcare room.
- 3) Infant injury happn during April, May, June and September and it's form 60percent of the whole.
- 4) As to injury of Each years old it happen in door relatively.
- 5) In most cases one of the cause of their injury is failure of kinder garden teacher.
 - Today, it's neccessary that we recognize inportance of the safety and agressive life of our children.

After this municipalities must come to grips with the difficult problem with a family and nursery school.

参考文献及び図書

1. 子ども白書. 1983;P120 ~P122日本子供を守る会
2. 子ども白書. 1992;P39~P40 日本子供を守る会

3. 日本の子どものからだの研究(その2)おかしさの実態調査:正木健雄他 日本体育学会、第30回記念大会号1970;
4. 児童の疲労と自覚症状調査と生活調査との関連、西部ベン他 学校保健研究Vol.23.1981
5. 中学生の健康調査 浜松市立湖東中学校生徒の血圧値を中心にして 中田健次郎他 静岡女子短期大学紀要第30巻1983
6. 中学生の健康調査アンケート調査より 長谷川憲一他 静岡女子短期大学紀要 第32巻1985
7. 国民衛生の動向 1995 第42巻 9号 P353 財団法人日本統計協会
8. ホモルーデンス S48 ヨハンホイジンガ 高橋英夫訳 中央公論社
9. 遊びと人間 S48 ロジエ カイヨワ、多田道太郎 塚崎幹夫 講談社
10. 土ふまずの形成と幼児の発達課題 1989原田碩三 黎明書房
11. 幼児体育に関する研究 幼児の運動能力テスト 1970 長谷川憲一他 日本保育学会資料
12. 幼児体育に関する研究 幼児の運動練習効果 1970 原田碩三他 日本保育学会資料
13. 幼児健康学 1989 原田碩三 黎明書房
14. 幼児の運動能力の発達 S48 長谷川憲一 第26回日本保育学会資料
15. 幼児の性格・行動特性と交通安全対策 S51 名古屋市幼児教育研究協議会
16. 体育科教育 1969 けがをしない子しやすい子 P7~13 平井信義 大修館
17. 体育の科学 子どもの遊びの現状と意義 1995 Vol45 P358~362 近藤充夫 杏林書院

